

特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と 指導方法の開発に関する基礎研究 (3)

—— 学級活動を事例として ——

林 尚示*¹・安井 一郎*²・鈴木 樹*³

学校教育学分野

(2017年9月26日受理)

1. はじめに

2017年3月に告示された小学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）では、全ての教科等は、①「知識及び技能」、②「思考力、判断力、表現力等」、③「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で児童生徒に育成すべき資質・能力の再整理が行われた。これらの資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」が提案された。本研究では、小学校の学級活動を事例として、社会的資質の育成に資する「主体的・対話的で深い学び」を実現するための望ましい指導方法モデルとその有効性について検討を行うことを目的とする。

2. 新学習指導要領における特別活動の目標と社会的資質との関連

2. 1 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を踏まえた目標の設定

今回の学習指導要領の改訂では、「各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしつつ、それらを育むに当たり、児童がどのような学びの過程を経るのかということ、さらにはそうした学びの過程において、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、教育活動の充実を図ること」が、各教科等の目標の中で示された。（文部科学省，2017c：11）

各教科等の特質に応じた「見方・考え方」とは、『『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方』である。またそれは、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものである。」（文部科学省，2017b：4）

特別活動では、『『集団や社会の形成者としての見方・考え方』を働かせながら『様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する』ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動である。』（文部科学省，2017c：11）という基本的性格に基づき、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点が示されている。

特別活動の全体目標、各活動・学校行事の目標では、これら三つの視点に基づき、育成すべき資質・能力が、「知識及び技能」（何を理解しているか、何ができるか）、「思考力、判断力、表現力等」（理解していること、できることをどう使うか）、「学びに向かう力、人間性等」（どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか）によって示されている。

2. 2 特別活動の目標

以上の学習指導要領改訂の基本方針を踏まえ、新学習指導要領では、小学校特別活動の目標が、現行のものから大幅に変更され、以下のように示されている。

*1 東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

*2 獨協大学（340-0042 草加市学園町1-1）

*3 鎌倉女子大学（247-8512 鎌倉市大船6-1-3）

「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

(2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

(3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。」(文部科学省, 2017a: 164) 上記の (1) が「知識及び技能」、(2) が「思考力、判断力、表現力等」、(3) が「学びに向かう力、人間性等」に該当する。

特別活動は、他の教科等と比べて、集団性と実践性という特質を強くもつ教育活動であり、そこで育まれる資質・能力は、学校や社会での生活を創り上げていくための基盤となる力として機能する。それ故、特別活動においては、「様々な集団活動の中で、『思考力・判断力・表現力等』を活用しながら他者と協力して実践することを通して、『知識及び技能』は実感を伴って体得され、活動を通して得られたことを生涯にわたって積極的に生かそうとする『学びに向かう力、人間性等』が育成されていく。」(文部科学省, 2017c: 29) という学びの過程に留意する必要がある。

2. 3 学級活動の目標・内容と育成すべき資質・能力

以上の特別活動の全体目標の下で、学級活動の目標は、次のように規定されている。

「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。」(文部科学省, 2017a: 164)

本研究で実践例として取り上げる小学校学級活動(1)の内容は、以下の通りである。

「(1) 学級や学校における生活づくりへの参画

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

学級や学校における生活をよりよくするための課題

を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること。

イ 学級内の組織づくりや役割の自覚

学級生活の充実や向上のため、児童が主体的に組織をつくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。

ウ 学校における多様な集団の生活の向上

児童会など学級の枠を超えた多様な集団における活動や学校行事を通して学校生活の向上を図るため、学級としての提案や取組を話し合っ決めていくこと。」(文部科学省 2017a: 164-165) 現行の内容と比べ、「生活づくりへの参画」と下線部が加えられ、イの「仕事の分担処理」が「役割の自覚」に変更されているが、これは新たに学級活動(3)として「一人一人のキャリア形成と自己実現」が加えられたことと関連していると考えられる。

学級活動(1)では、「主として自発的、自治的な集団活動の計画や運営に関わるものであり、教師の適切な指導の下での、学級としての議題選定や話し合い、合意形成とそれに基づく実践を重視する」ことにより、以下の資質・能力の育成が図られる。

「学級や学校の生活上の諸問題を話し合っ解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付けるようにする。」(知識及び技能 *筆者加筆, 以下同)

「学級や学校の生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図り、協働して実践することができるようにする。」(思考力、判断力、表現力等)

「生活上の諸問題の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。」(学びに向かう力、人間性等) (文部科学省, 2017c: 47)

学級活動(1)で取り上げる課題は、「学級や学校生活の充実と向上を図るために、学級の児童全員が協働して取り組まなければ解決できないものでなければならない。」(同上)とされており、学級活動(1)は特別活動における社会的資質育成の基盤をなすものであると意味づけることができる。

2. 4 新学習指導要領で求められる社会的資質

今回の改訂では、「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されている。「教育課程に基づく個々の教育活動が、児童一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合っ関わり合い、自

らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。」(文部科学省, 2017b: 35, 部筆者)と述べられているように、従来の学習指導要領以上に、児童生徒の学びの社会的意義を強調し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力=社会的資質の育成を重視している。

特別活動は、これまで本研究が明らかにしてきたように(林・安井・鈴木, 2016, 2017他), 社会性育成の中心的な役割を果たしてきたが、新学習指導要領では、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせて、よりよい人間関係の形成(人間関係形成)、よりよい集団生活の構築や社会への参画(社会参画)及び自己の実現(自己実現)に向けた実践を展開することが求められている。

以下では、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」の三つの視点が特別活動の目標及び学級活動(1)で育む資質・能力のどの部分に関わっているのかについて検討する。

人間関係形成は、「集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点である。人間関係形成に必要な資質・能力は、集団の中において、課題の発見から実践、振り返りなど特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくるのが大切である。」(文部科学省 2017c: 12) 人間関係形成に関わる目標は以下の文言として表されている。

目標 (1): 多様な他者と協働する

目標 (2): 人間関係の課題を見だし、解決する

目標 (3): 人間関係をよりよく形成する

学級活動 (1): 他者と協働して取り組む、人間関係をよりよく形成する

社会参画は、「よりよい学級・学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点である。社会参画のために必要な資質・能力は、集団の中において、自発的・自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれるものと考えられる。学校は一つの小さな社会であると同時に、様々な集団から構成される。学校内の様々な集団における活動に関わることで、地域や社会に対する参画、持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながっていく。」(同上: 12) 社会参画に関わる目標は

以下の文言として表されている。

目標 (1): 様々な集団活動の意義や活動

目標 (2): 集団や自己の生活の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする

目標 (3): 集団や社会における生活をよりよく形成する

学級活動 (1): 学級や学校の生活上の諸問題を話し合っ解決する、学級や学校の生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、多様な意見を生かして合意形成を図る

自己実現は、「一般的には様々な意味で用いられるが、特別活動においては、集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見しよりよく改善しようとする視点である。自己実現のために必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の在り方生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれるものと考えられる。」(同上: 13) 自己実現に関わる目標は以下の文言として表されている。

目標 (1): (多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で) 必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする

目標 (2): 話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができる

目標 (3): 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、…人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う

学級活動 (1): 合意形成の手順や活動の方法を身に付けるようにする、協働して実践することができるようにする、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする態度を養う

したがって、特別活動において社会的資質の育成を図るより効果的な指導内容と指導方法を開発するためには、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」がどのような相互関連をもって実践に反映され、学びの過程として具体化されていくのか、その過程を明らかにすることが求められる。

本研究では、小学校の学級活動(1)ア「学級や学校における生活上の諸問題の解決」の「1年間お世話になったA先生のお別れ会を開こう」及び「1学期のお楽しみ会の計画を立てよう」を事例として、集団や社会の形成者としての見方・考え方の三つの視点と育成すべき資質・能力の三つの柱に基づく社会的資質が実際の授業の中でどのように関連づけられながら実践

されているのかを分析するための授業評価シートを作成し、その有効性について試行的に検討する。

(安井一郎)

3. 学級活動の指導モデル

3. 1 中央教育審議会答申による指導モデル

学級活動の指導過程は、公のものとしては、中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（中教審第197号）（平成28年12月21日）の別添17-3「特別活動における学級活動・ホームルーム活動の学習過程のイメージ」にまとめられたものが公表されている。この指導モデルでは、学級活動の学習過程を、①問題の発見・確認、②解決方法の話合い、③解決方法の決定、④決めたことの実践、⑤振り返りという5段階とし、特別活動で育成される資質・能力である「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」という3つの視点との対応を示している。

次に、現在の学級活動の課題を検討するため、この指導モデルに基づいて、学級活動の授業分析を行った。

3. 2 指導モデルに基づく授業分析

3. 2. 1 調査対象の概要

分析した授業実践は、次のとおりである。

①対象：小金井市立小金井第二小学校5年2組

②担任：B教諭（男性）

③実践の日時と活動名：

・2017年3月10日（金）3校時

学級活動（1）「1年間お世話になったA先生のお別れ会を開こう」

・2017年3月22日（水）4校時

学級活動（1）「A先生のお別れ会」

小金井市立小金井第二小学校は、東京都市部の住宅街にある小学校である。眞壁玲子校長は特別活動に造詣が深い。小金井第二小学校では、「たてわり集会」という児童会活動の異年齢集団による交流を行っている（林・安井・鈴木、2017：51, 55-56）。このように特別活動について、特徴的な活動を行っているため、小金井第二小学校を調査対象とした。学級活動の実践の調査にあたり、校長に相談した結果、B教諭が担任である5年2組の実践を調査することにした。

B教諭は若手の男性教諭である。算数科教育を教科の専門としており、特別活動を専門とするわけではな

いが、特別活動に造詣の深い校長が推薦するだけのことがあり、学級活動の話合い活動の指導に対して、十分な指導力を持っている。また、3月10日にお別れ会をひらいてもらったA先生は、ボランティアの学習支援員である。

3. 2. 2 学級活動実践の結果

3月10日（金）3校時、10時30分から11時20分、5年2組の教室で、学級活動（1）の話合い活動「1年間お世話になったA先生のお別れ会を開こう」の実践を観察した。

この学級の話合い活動は、国立教育政策研究所『特別活動指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』（国立教育政策研究所：2014）に沿った典型的なものであった。ここから、B教諭の指導力の高さがうかがわれた。

次に、中教審第197号の別添17-3「特別活動における学級活動・ホームルーム活動の学習過程のイメージ」との比較を試みる。

まず、別添17-3で学習活動の全体で育成される資質・能力の「人間関係形成」として、「よりよい人間関係を育むための思考力・判断力・表現力など」が挙げられている。本活動では、他者に配慮をしながら考え、判断し、発言している様子が観察され、「人間関係形成」については、別添17-3の通り実践、育成されているものと判断した。

次に、①から⑤の学習過程に沿って、中教審第197号の別添17-3の活動内容と本実践における活動との関係を検討する。

まず、「①問題の発見・確認」では、別添17-3によれば、「(i) 学級や学校における生活の諸問題に気付く、その中から議題を学級全員で決定する。話合いの計画を立て、解決に向けて自分の考えをもつ。」「(ii) 日常生活や自己の課題、目標、学業や進路に関する内容について、教師が設定した課題を確認し、解決の見通しをもつ。」という活動が行われることが想定されている。本実践では、「はじめの言葉」、「A先生のお別れ会をしよう」という「議題の確認」が行われ、「国語や社会の勉強を教えてもらって大変お世話になったので、感謝の気持ちを伝えたい」という「提案理由」が述べられ、B教諭より「以前の〇〇先生（教育実習生の先生）のお別れ会をふまえてよりよいものにしていきましょう」という一言諸注意が述べられ、話合いが始まった。このように、別添17-3に沿って活動が行われていることが確認できた。

次に、「②解決方法の話合い」では、「(i) よりよ

い生活をつくるための問題の原因や具体的な解決方法、役割分担などについて話し合う。」および「(ii) 設定された課題の状況や自分の問題の状況を把握し、原因や具体的な解決方法などについて話し合う。」という活動が想定されている。本実践では、出し物を「班ごとに行くか」「係ごとに行くか」ということについて、「班ごと」を支持する児童は「係と出し物は関係ない」という理由を述べ、「係ごと」を支持する児童は「〇〇先生のお別れ会するとき、係ごとに行ったら盛り上がった」という理由を述べ、それぞれの賛成理由を述べる児童がほぼ同数で、拮抗しなかな合意形成が行われなかった。ここで、担任のB教諭は「試しに多数決をしてみよう」という提案をする。その結果、「班ごと」を支持する児童の方が若干多いことがわかる。多数決で結果を決めたわけではないが、この結果を知り、全体が「班ごと」で出し物をする方向に傾いていった。B教諭が「試しに多数決をしてみよう」と提案したことには賛否があるかもしれないが、問題の解決に対して十分な話し合いが行われ、全員が納得して「班ごと」の出し物をすることを決定した。よって、②の活動も十分に行われているものと考えられる。

「③解決方法の決定」では、「話し合い活動で具体化された解決方法等の中から合意形成を図ったり、意思決定したりする。」という活動が想定されている。本実践では、「③活動方法の決定」において、「ドッキリをする」「プレゼント」「班ごとの出し物」「まちがいがし」というA先生のお別れ会で行う事柄が合意形成の上決まっていた。

「④決めたことの実践」では、「決定した解決方法や活動内容を責任をもって実践する。」という活動が想定されている。本実践では、話し合いで決めた内容と役割分担にしたがって、3月22日(水)4校時に、「A先生のお別れ会」の実践が行われた。

決めたことの実践の後には、「⑤振り返り」が行われる。別添17-3で想定されている活動は、「実践を定期的に振り返り、意識化を図るとともに、結果を分析し次の課題解決に生かす。実践の継続や新たな課題の発見につなげる。」というものである。ところが、3月10日(金)の話し合い活動では、B教諭が学級会ノートとして用いる振り返りシートを準備していたが、話し合いが授業時間を超えて長引いたため、振り返りシートに記入する時間がとれなかった。それは別にしても、意思決定や合意形成が行われた後にこの過程で想定されている「実践の意識化を図る」ことは、児童が自分の活動についてのメタ認知を持つことが必要であり、非常に難しい。また、「A先生のお別れ会」につ

いても同様で、児童が実践を振り返るに当たっては、教科のように「割り算の筆算ができた」「逆上がりができた」というような実感を持たせることは難しく、これも、活動を楽しんでいるのと同時に、「活動がうまくいったか」というメタ認知を持つ必要があり、これも非常に難しい。しかし、活動がやりっぱなしで終わらないためには、「⑤振り返り」が重要である。

したがって、中教審第197号の別添17-3の指導モデルをより有効に機能させるためには、振り返り段階の工夫が必要であると考えられるのである。この仮説に基づき、次に振り返り段階の工夫を行った。

(鈴木 樹)

4. 振り返り段階の工夫

4.1 理論的検討

教育学での評価研究としてまず、想起されるのはベンジャミン・ブルーム(Benjamin Samuel Bloom, 1913年-1999年)である。ブルームは教育評価をその評価の機能によって診断的評価、形成的評価、総括的評価の三つに分類した。この考え方を生かしつつも、一方でトレーニング・プログラムの評価研究からの成果も活用しようと考えた。それは、活動単位での評価に加えて、学校の教育目標達成に対してどの程度特別活動が貢献したのかといった視点が大切であると考えたからである。

トレーニング・プログラムの評価研究では、ドナルド・カークパトリック(Donald Kirkpatrick, 1924年-2014年)の研究が顕著な成果をおさめている。カークパトリックは1959年から米国の『トレーニング・アンド・ディベロップメント・ジャーナル』(Training and Development Journal)に一連の論文を発表し、1994年に『トレーニング・プログラムの評価』(Evaluating Training Programs)という書籍を出版している。

本研究では、ドナルド・カークパトリックがトレーニングコース評価のために作成した4段階評価法(Four-Level Training Evaluation Model)の理論を応用して、学級活動の振り返り段階の検討をすることとした。このモデルは反応(Reaction)、学習(Learning)、行動(Behavior)、結果(Results)で構成される。ドナルド・カークパトリックはウィスコンシン大学名誉教授であり、米国人材開発機構(American Society for Training and Development: ASTD)元会長である。現在の団体名はAssociation for Talent Developmentとなっており、100カ国以上の国々に約40,000人の会員をもつ組織である。

4. 2 振り返り段階を中心とした評価シートの検討と活用

昨年度より本研究にご協力いただいている協力校の校長、教諭、林、安井、鈴木で、国立教育政策研究所や東京都などの刊行する教員向け指導資料をふまえて、新学習指導要領下で活用可能な社会的資質を育成する指導モデルの振り返り段階の工夫について検討した。特別活動の指導資料や筆者が委員として関わる人権教育、いじめ防止などの指導資料について検討した結果、何がわかったかという学習の評価については充実していた。一方で、満足度等の反応の評価は手薄、トレーニングによって日常で行動変容が起きたかという評価は手薄、トレーニングによって学校等で目指す成果にどの程度影響があったかという評価は手薄であった。昨年度以降、授業参観、録画した授業を実施教諭、安井、鈴木、林で振り返り、実施教諭の意図を確認した。振り返りについて校長、教諭と意見交換、林による案の作成、校長・教諭による学校対応版の作成、教諭による実施という手順で研究を進めた。カークパトリック・モデルの学級活動への応用としては、次のようにまとめた。

反応—児童が当該学級活動について考えて感じたこと、満足感を授業直後の振り返りシートにより把握する。

学習—当該学級活動の結果として生じる「知識及び

技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の向上について、振り返りシートにより把握する。反応と学習はともに授業直後の確認であるため、各児童に1枚の振り返りシートを配布して調査した。

行動—「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の育成場面から学級生活や学校生活への転移についての把握である。この評価は、児童が学級に在籍している間に、授業終了後一定期間が経過してから実施する。今回の調査では、学期末の授業最終日に実施した。評価は通常、教師の観察によって行いが、今回の調査では学校との調整の結果、質問紙形式での実施とした。学期末実施のため、結果を教師が精査し、通知表の行動の記録と連動させる活用方法も考えられる。

結果—当該学級活動で児童が発生した最終結果についての把握である。学校教育目標の達成状況、学力向上、生徒指導上の諸問題の解決などを考慮して項目設定ができる。本調査では学校教育目標をもとに組織の業績への貢献度を測定することとした。なお、実証実験は現在継続中のため、結果の評価は今年度末実施予定である。

対象とした学級活動の指導案の抜粋を次に示す。当初の計画では1時間の予定であったが、実際の授業は

第6学年 学級活動(1) 学習指導案

日時 平成29年7月7日(金)

第6校時 14:35-15:20

対象 6年1組 40名

授業者 葛西 諒

場所 3階6-1教室

1 単元(題材)名 「1学期のお楽しみ会を成功させよう。」

議題 「1学期のお楽しみ会の計画を立てよう。」

時間	具体的な学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価内容と方法
導入 5分	1.本時の学習と議題を知る。		
	1学期のお楽しみ会の計画を立てよう。		
	2.司会グループを知る。	・事前に司会グループに司会の仕事を確認させておく。	
展開 35分	3.議題について学級会を行う。 ・学級会の仕方の確認。 ・意見を出し合う話し合い。 ・意見を比べる話し合い。 ・意見をまとめる話し合い。 ・決まったことの確認。	・遊びの条件を説明する。 提案理由 「小学校生活最後の1学期の終わりにお楽しみ会を開いて、楽しく夏休みに入りたいから。」 ・話し合いの流れがわかるように板書をする。 ・司会グループが困っているときは、助言する。	(関)友達の話をよく聞こうとしている。(観察・カード) (思)一人一人の意見を大切にしながら進めている。(観察・カード) (知)友達の考えを理解しようとしている。(観察・カード)
まとめ 5分	4.今日の学習の振り返りをする。 5.教師の話を聞く。	・学習カードに振り返りを記入させ、発表させる。 ・司会グループへの労い、話し合いでよかったことを中心に話す。	

図1 作成した学級活動(1)の学習指導案

表1 振り返りシートの原案

学級活動振り返りシート 各回ごとに項目を切り出して使用

学年(6)組()番号()氏名()

例 学期末自己評価用「成績に影響することはありません。学級活動(お楽しみ会)の経験を振り返って、次の9項目についてできるようになったかどうか、現在の状況思ったとおりに回答してください。」

番号	資質・能力	視点	活動項目	次の項目にお答えください。(校長先生作成)	授業前自己評価	授業の印象 (授業後自己評価)	学んだこと (授業後自己評価)	普段の様子 (学期末自己評価)	結果 学校目標「心豊か子ども」「自ら考え行動する子ども」「品のある子ども」 (学年末教師評価)
					どれかひとつに○をつけてください。	どれかひとつに○を付けてください。	どれかひとつに○を付けてください。	どれかひとつに○を付けてください。	◎はい、○はい、△もう少し、で記入してください。
1	知識・技能	人間関係形成	多様な他者と協働する様々な集団活動の意義	相手の思いを受け止めたり聴いたり、相手の立場や考え方を理解する。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない	左に書かれた活動をとおした感想はどうでしたか。 ()楽しんだよ良かった ()たいたいよ良かった ()もう少し	()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって思いやりが持てるようになった()
2	知識・技能	社会参画	集団活動を行う上で必要となること	みんなで活動するためのルールを守る。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって言葉づかいがよいになった()
3	知識・技能	自己実現	集団での行動の仕方	学級に自分のよさや可能性を活かすことができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって進んで行動できるようになった()
4	思考力・判断力・表現力等	人間関係形成	集団や自己の生活の課題	互いの意見に折り合いを付けながら話し合いで決めることができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって思いやりが持てるようになった()
5	思考力・判断力・表現力等	社会参画	解決するための話し合い	解決するためにみんなの力を合わせて話し合いができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって言葉づかいがよいになった()
6	思考力・判断力・表現力等	自己実現	意思決定	集団の一員であることを考え、集団で決定することができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって進んで行動できるようになった()
7	学びに向かう力・人間性等	人間関係形成	自主的、実質的な集団活動を通して身に付けたこと	よりよい学級生活のために自主的に行動することができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって思いやりが持てるようになった()
8	学びに向かう力・人間性等	社会参画	集団や社会における生活	よりよい学級にすることで進んで自分の役割を果たすことができる。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	活動によって言葉づかいがよいになった()
9	学びに向かう力・人間性等	自己実現	自己の生き方についての考え	希望や目標をもって生活している。	()とても大切だと思う ()たいたいそう思う ()あまり思わない		()できた ()たいたいできた ()もう少し	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し	将来の希望や目標をもって生活できるようになった()

表2 学級活動行動シート

学級活動行動シート

学年(6)組()番号()氏名()

成績に影響することはありません。学級活動(お楽しみ会)の経験を振り返って、次の9項目についてできるようになったかどうか、現在の状況思ったとおりに回答してください。

番号	次の項目にお答えください。	普段の様子 (学期末自己評価)
		どれかひとつに○を付けてください。
1	相手の思いを受け止めたり聴いたり、相手の立場や考え方を理解する。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
2	みんなで活動するためのルールを守る。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
3	学級に自分のよさや可能性を活かすことができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
4	互いの意見に折り合いを付けながら話し合いで決めることができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
5	解決するためにみんなの力を合わせて話し合いができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
6	集団の一員であることを考え、集団で決定することができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
7	よりよい学級生活のために自主的に行動することができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
8	よりよい学級にすることで進んで自分の役割を果たすことができる。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し
9	希望や目標をもって生活している。	()できるようになった ()たいたいできるようになった ()もう少し

2週にわたり合計2時間で実施された。

上記の表は振り返りシートの原案である。実際の調査では、活動項目に対応させて校長が作成し質問項目と選択肢で構成した表2の振り返りシートを用いている。

この授業は映像によって特徴の分析も実施した。方法は、まず教師が育成しようとしている資質・能力を知識、スキル、態度・価値に分類し、それぞれについて人間関係形成、社会参画、自己実現の視点のどれを重視しているかという見方でコンピュータ上に合計9

つのアイコンを作成した。次に映像を確認しながら該当する指導内容の場面でアイコンをクリックし、タイムライン上に指導内容を帯状に表示させた。指導内容のコーディングについては、これまでの研究でコーディング作業に慣れていることもあり林が担当した。

この授業分析の利点は2点ある。1つ目は授業のどの場面でどの資質・能力を育成しようとしているかコーディングされたタイムラインから判断可能なことである。2つ目は時間数で指導量を客観的に把握できることである。図2によると、今回の学級活動は、資質・能力からみるとスキル重視型、自己・他者・社会との関係の視点で見ると社会参画の視点重視型である。なお、ここでの社会参画とは個別活動、ペア活動を除いて、グループ活動又は学級全体での活動場面で学級生活づくりなどに主体的に参画し様々な問題を解決しようとする場面を抽出している。

授業前の診断的評価と学期末の行動変容を比較してみると、スキルの自己実現に関する項目「集団の一員であることを考え、集団で決定することができる」については行動変容の評価が高い。このことは、今回の研究で明らかにできた成果である。

学習成果の評価と行動変容の評価で比較すると、知識の人間関係形成と社会参画と自己実現に関する項目、スキルの人間関係形成と自己実現に関する項目、態度・価値の社会参画に関する項目については、授業直後の学習成果での気づきは控えめであったが学期末



図2 映像による授業分析

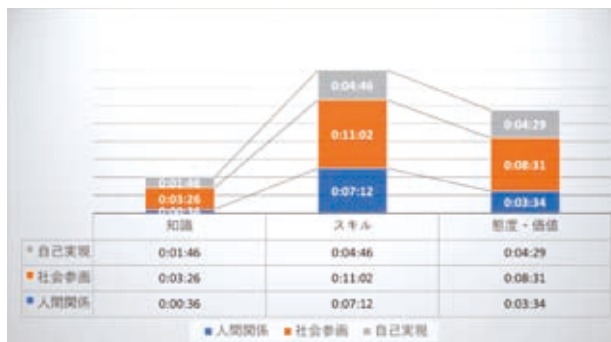
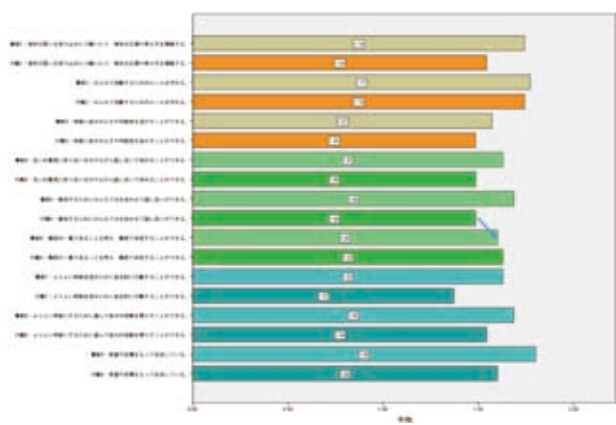
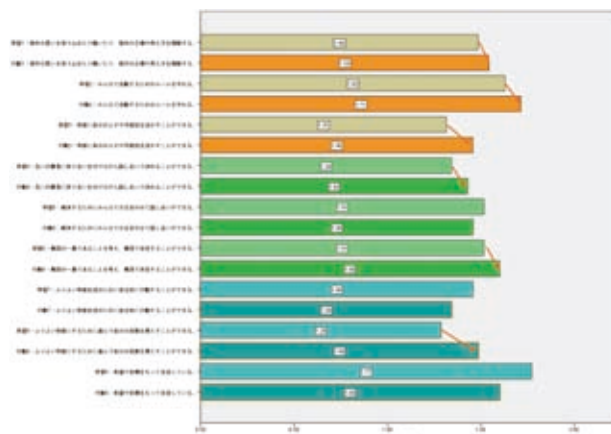


図3 授業の特徴



低←0・1・2→高
図4 診断的評価と行動変容



低←0・1・2→高
図5 学習成果と行動変容

の行動変容では評価が上昇していた。

また、第一段階評価の反応（満足度）については、反応（取り組んでよかったか）と「学習4・互いの意見に折り合いを付けながら話し合いで決めることができる」との関係について顕著な関係が見いだせた。授業に満足であった児童は話し合い活動で意見に折り合いを付けられた児童であることがわかった。

5. おわりに

本研究では、小学校の学級活動を事例として、特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究を進めてきた。その結果、3つの成果を示すことができた。

本研究の成果の1つ目は、新学習指導要領の中でも社会的資質の育成が継続して重視されていることが明らかとなったことである。

2つ目は、新学習指導要領で重視される社会的資質を育成する指導方法モデルを有効に機能させるためには、特に振り返り段階の工夫が重要であることが明らかとなったことである。

3つ目は、振り返り段階では、行動変容等をみとめる継続的な評価シートの活用等が必要であることが明らかとなったことである。

なお、年度末の学校教育目標との対応による評価で、学級活動が期待どおりの効果を発揮できているかということについては残された課題である。このことは、本研究の一部として今後確認していきたい。

(林 尚示)

謝 辞

ご協力いただいた東京都小金井市立小金井第二小学校眞壁玲子校長、葛西諒教諭に感謝申し上げます。本研究はJSPS 科研費15K04484の助成を受けたものである。

参考文献等一覧

中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』 (中教審第197号) (平成28年12月)

21日), 100。

James D. Kirkpatrick, Wendy Kayser Kirkpatrick, “Kirkpatrick’s Four Levels of Training Evaluation” Alexandria: ATD Press, 2016

林尚示・安井一郎・鈴木樹 (2016) 「特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究 (1)」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』(67), 43-53。

林尚示・安井一郎・鈴木樹 (2017) 「特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究 (2) - 生徒指導及び道徳教育の機能に着目して -」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』(68), 47-59。

文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afidfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf 最終閲覧日 2017.9.9。

文部科学省 (2017b) 『小学校学習指導要領解説 総則編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afidfile/2017/07/12/1387017_1_1.pdf 最終閲覧日 2017.9.9。

文部科学省 (2017c) 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afidfile/2017/07/25/1387017_15_1.pdf 最終閲覧日 2017.9.9。

特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と 指導方法の開発に関する基礎研究 (3)

— 学級活動を事例として —

Basic Research on Development of Teaching Contents and Instruction Method to Foster Social Qualities by Extraclass Activities (3):

Case Study of Classroom Activities

林 尚示*¹・安井 一郎*²・鈴木 樹*³

Masami HAYASHI, Ichiro YASUI and Tatsuki SUZUKI

学校教育学分野

Abstract

In this research, we have been conducting basic research on teaching contents and educational method development for nurturing social qualities by extraclass activities as case examples of elementary school class activities. As a result, we were able to show three outcomes.

First, we analyzed the overall objectives of extraclass activities of the next elementary school course of study and the contents of classroom activities (1) from the perspective of nurturing social qualities. As a result, the viewpoint of nurturing social qualities in the past extraclass activities was inherited and emphasized as “formation of human relationships”, “social participation”, “self-realization”.

Secondly, based on the instructional model of the classroom activities indicated in the report of the Central Education Council (Chukyoshin No.197), we analyzed the class activities of the 5th grade of Koganei Daini Elementary School in Koganei City, Tokyo. As a result, it became clear that the idea of the “reviewing stage” is particularly important in order for the instructional model to foster social qualities that are emphasized in the instructional model in the next course of study to function effectively.

Thirdly, as a devise for the “reviewing stage”, by using the 4-step evaluation method of Donald Kirkpatrick, creating a teaching plan by the principal, teacher, and researchers and developing a corresponding “continuous evaluation sheet”. As a result of utilizing it, it turned out that “continuous evaluation sheet” which takes action change etc. is effective in “reviewing stage”.

Keywords: extraclass activities, social qualities, classroom activities, competency

*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*2 Dokkyo University (1-1 Gakuen-cho, Soka-shi, Saitama, 340-0042, Japan)

*3 Kamakura Women's University (6-1-3 Ofuna, kamakura-shi, Kanagawa, 247-8512, Japan)

要旨: 本研究では、小学校の学級活動を事例として、特別活動で社会的資質を育成するための指導内容と指導方法の開発に関する基礎研究を進めてきた。そして、3つの成果を示すことができた。

第1に、新小学校学習指導要領の特別活動の目標と学級活動(1)の内容を社会的資質の育成の視点から分析した。その結果、これまでの特別活動における社会的資質の育成についての視点が「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」として継続され重視されていた。

第2に、中央教育審議会答申(中教審第197号)で示された学級活動の指導モデルに基づき、東京都小金井市立小金井第二小学校第5学年の学級活動を分析した。その結果、新学習指導要領で重視される社会的資質を育成する指導モデルを有効に機能させるためには、特に「振り返り段階」の工夫が重要であることが明らかとなった。

第3に、「振り返り段階」についての工夫として、カークパトリックの4段階評価法を活用し、校長、教諭、研究者により学習指導案を作成し、それに対応する「継続的な評価シート」を開発した。それらの活用の結果、「振り返り段階」では、行動変容等をみとる「継続的な評価シート」が有効であることが明らかとなった。

キーワード: 特別活動, 社会的資質, 学級活動, 資質・能力